

クラスワイドのPBSによる「いいところ探し」の取り組み ～SWPBSとの連携と効果～

Positive Peer Reporting as a Classwide Positive Behavior Support

○大対香奈子・月本弾・田中善大・野田航・大久保賢一

(近畿大学) (畿央大学大学院) (大阪樟蔭女子大学) (大阪教育大学) (畿央大学)

Kanako Otsui, Hazumu Tsukimoto, Yoshihiro Tanaka, Wataru Noda, & Kenichi, Ohkubo

(Kindai University) (Kio University) (Osaka Shoin Women's University) (Osaka Kyoiku University) (Kio University)

Key words: Positive Peer Reporting, CWPBS, SWPBS

問題と目的

2007年4月に「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられて以来、通常学級において様々な発達課題をもつ児童生徒が適応的に学校生活を送れることを目指す取り組みが模索されており、Positive Behavior Supports (以下、PBSとする)が日本においても導入されるようになってきた。中でも、学校規模でPBSを実践するSchool-wide PBS (以下、SWPBSとする)は、多層支援システムにより、全ての児童生徒の行動面や学業面の改善に成果を上げている (Lewis & Sugai, 1999)。

本研究では、SWPBSが導入された公立小学校において、導入に先立って3年生の1学級でクラスワイドの「いいところ探し」の取り組みを実施した。「いいところ探し」はPositive Peer Reporting (以下、PPRとする)と呼ばれる手続きであり、子ども同士のポジティブな相互作用の増加や、また仲間間地位の向上に効果があることが確認されている (Bowers et al., 1999)。

本研究の目的は、クラスワイドのPBSとして実施した「いいところ探し」により、児童間で強化し合う行動が増えたかどうか、また仲間との関わりスキルについての児童の主観的評価が向上するかを検討することであった。また、この取り組み後に導入されたSWPBSへの繋がりについても考察する。

方法

対象 公立小学校3年生1学級 (児童数26名) を対象として実施した。なお、本研究を実施した小学校では、本研究の著者らがコンサルタントとして関わり、同年9月よりSWPBSが導入された。研究の実施と成果の公表については、教育委員会、学校長および学級担任の同意を得ている。

期間 X年5月から9月にかけて実施した。

手続き 本研究の第一著者がコンサルタントとして対象学級の観察および担任教員との協議を行った。担任教員から、子ども同士の関わりを増やし、自主性を高めたいという要望があり、実際に観察でも子ども同士のポジティブな声かけがほとんど見られなかったことから、「いいところ探し」の取り組みを行うことが決定された。

ベースライン期 (BL) では、教室内にポストとカードを設置し、友達のよい発言やよい行動を見つけたらカードに書いて投函できるようにした。介入1では、帰りの会で投函数やカードに書かれた内容について、特に書かれる対象にあがりにくい児童についての内容を紹介してフィードバックを行った (介入1-1)。また、介入1の途中から、担任教員が選んだカードを教室内に掲示するようにした (介入1-2)。介入1では、投函した人が一部に限定的になっている傾向が見られ、また投函数も大きくは増加しなかった。その原因として「いつでも見つけた時に書く」という設定が考えられたため、介入2ではカードに記入するための時間を確保することにした。カー

ドの累積投函数が増えていくにしたがって、自然発生的に児童らから「1000枚目指そう」という声が起こり、8月1日時点から目標投函数が1000枚と設定された。

指標 クラスワイドのPPRの実施による、児童間でお互いに強化し合う行動の指標を、「いいところ探し」のカード投函数とした。また、仲間との関わり方についての児童の主観的評価の変化を検討するため、「目標スキルの児童自己評定尺度 (佐藤ら, 2013)」を介入の前後で実施した。

結果

Figure 1には、カードを投函した人数、投函数、累積の投函数の変化を示した。介入2の開始と同時に、投函者の人数、投函数が共に大きく増加した。

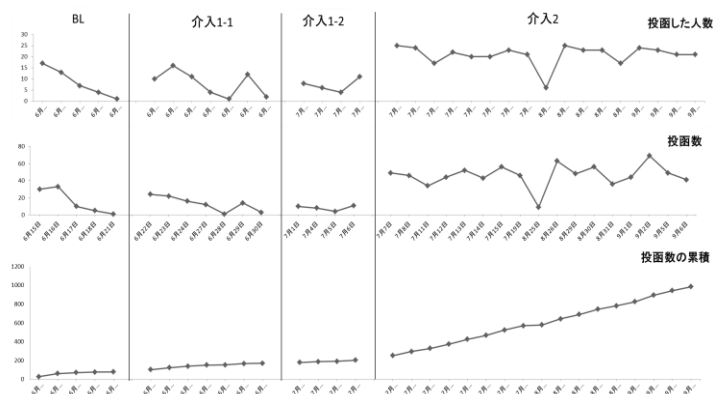


Figure 1. カード投函行動の変化

「いいところ探し」に関連する「やさしい言葉かけ」と「あいてを思いやる」スキルの児童の自己評価について、介入前後での変化を検討したところ、「やさしい言葉かけ」はpreからpostへの有意な得点の向上が見られたが ($t(25) = 4.00, p < .05$), 「あいてを思いやる」の得点については有意な変化は見られなかった。

考察

結果より、「いいところ探し」の取り組みによって、児童間で強化し合う行動が増加し、また「やさしい言葉かけ」についての自己評価も上がったことが分かった。「いいところ探し」は子ども同士が強化し合う環境設定を作り出すことから、本研究のようにSWPBSの導入に向けて学級で取り組んでおくことで、標的行動を教員からだけでなく児童間でも強化することが可能となり、SWPBSの効果をより高めることが期待される。今後は、PPRの手続きを加えることによるSWPBSの効果についてより実証的な検証を行うことが必要である。

引用文献

- Bowers, F. E., Ervin, R. A., & Friman, P. C. (1999). Merging research and practice: The example of positive peer reporting applied to social rejection. *Education and Treatment of Children, 22*, 218-226.
- Lewis, T. J., & Sugai, G. (1999). Effective behavior support: A Systems approach to proactive school wide management. *Focus on Educational Children, 31*, 1-24.